

## 神仏の受容と紫波の宗教遺産

**古代の神祇祭祀** 仏教が伝来する以前のわが国には、土着の宗教（信仰）として原始神道（古神道）が存在した。古来の祭祀は神祇祭祀（天つ神と国つ神）と呼ばれる。古くは在地社会において氏族の長や在地豪族が祭礼と政治の一致を図るため、「国つ神」を祀る神社が創建された。「国つ神」はそれぞれの地域の祖霊神、鎮守神、産土神（うぶすながみ）である。律令政府は祭政一致の下に国家を統率するため、中央集権的な「天つ神」を基本とする神祇体制を整備した。「天つ神」とは、記紀神話（古事記・日本書紀）に登場する神々である。

律令政府は官社（式内社）を定め、神に貢物を奉獻する幣帛（へいはく）制度や神階制度を整備し、靈験があるとされた神社の多くを官社として神祇官の公簿に採録した。『延喜式』の「神名帳」には官社として2861の神社が掲載されている。現在、多くの神社に祭られている祭神は、イザナキ・イザナミなどの記紀神話に登場する神々が多い。これは明治維新以降、復古思想を基調とする神道政策によって祭神を明確化する過程で、多くの神社がその祭神を記紀神話に記載された神やその由緒を在地の伝承・口承に求めたからである。

官社に登載された神社では、記紀神話や移民によって移された神が祀られていた形跡は少なく、地名を冠した在地神が圧倒的に多い。最北の式内社である志賀理和気神社の祭神も官社になる前は在地神の「志賀理和気神」を祀っていた。その祭神の由来や神徳は定かではない。

**奈良時代の仏教** 古墳時代に新たに伝来した仏は、在来の神祇である「国つ神」に対し、蕃神（ばんしん＝外から来た神）と位置付けられ、外国から渡来した神の一種として捉えられていた。その後、崇仏・排仏論争を経て、奈良時代には仏法によって国家を鎮め護る「鎮護国家」の思想を背景に、仏教は国家の庇護を受けて大きく発展した。仏教に基づく鎮護国家の思想はこの時代の特徴であり、国分寺建立や大仏造立などの大事業が進められた。

地方の神社を朝廷の統制下に置こうとする神祇制度は整備されが、地方の神社では軌道に乗らず、律令制の崩壊を機に多くの神社が財政基盤を失っていった。この傾向は神社だけではなく官寺などにもみられる。国家からの援助を絶たれた寺院は、財政基盤を築くために民衆にも分け入り、法を説き喜捨（金品寄付）を求めながら、その教線を全国に拡大させていった。

8世紀中頃には国家の宗教体制における仏教の比重が高まり、社会に根づく過程では、仏教が現世利益を求める手段とされ、在来の祖先崇拜と結びついた追善供養の阿弥陀信仰が行われるなど、仏と神は本来同一であるとする神仏習合の思潮が現われ始めた。『続日本紀』によれば、八幡神に対し読経が行われている。神仏習合の思潮は、大仏造営をめぐる八幡神の中央進出と護国宗教における仏教重視の高まりとともに展開され、護法善神（仏法を守護する梵天・帝釈天・四天王などの神）の観念を生み出した。

県内では北上川流域に古代の寺院やその遺跡が集中している。この流域の寺院は、律令政府による胆沢城や志波城の整備を契機に国家鎮護、蝦夷の鎮撫や教化、古墳の造成に代わるものとして建立され、仏教は寺院や城柵での法会をとおして普及していった。

『吾妻鏡』によれば、高水寺は奈良時代に称徳天皇の勅願によって建立されたとの伝承を伝え、本尊として一丈の観自在菩薩像が安置されていた。寺伝では神護景雲2年（768）の創建を伝えるが、この時期の志

波村の蝦夷は律令政府と軍事的に緊張関係にあり、宝亀7年（776）に志波村の蝦夷が出羽の国府軍と交戦している。高水寺は、北上川流域における征夷の北進とともに、鎮護国家や蝦夷の教化、開拓民の安寧を目的に造営された寺院と考えられる。

**平安時代の仏教** 奈良時代の後半には仏教が政治に深く関与し、過度な仏教中心の政策が進められ、多くの弊害をともなった。平安時代は、従来の国家的な仏教とは異なる新しい仏教が志向され、天台宗・真言宗が興り、密教が盛んになったという特色をもつ。

密教は、真理そのものの現れであるとされる大日如来が説いた秘密の教えであり、秘密の呪法の伝授・習得により悟りを開こうとするものである。これに対し、釈迦や如来（真理に達した者）の説いた教えを經典から学び修行して悟りを開こうとするものが顕教（けんぎょう）である。天台宗・真言宗はともに密教として国家・社会の安泰を願う加持祈禱を行い、修行を行うことによって悟りを開き、人が生きたまま仏になるという即身成仏や現世利益を説いた。さらに仏（僧）に対して喜捨を行えば悟りへの縁を結ぶことができると主唱し、藤原氏をはじめとする多くの貴族層の帰依を受け、造寺・造仏や荘園の寄進がさかに行われた。

他方、古代から中世にかけて仏教が展開する過程で、山林にこもって実践修行する僧たちの出現によって神仏習合は広範囲に浸透し、やがて平安仏教の母体となっていった。

平安時代中期以降、神仏習合の考え方は全国に浸透し、各地の霊山信仰を包摂しながら拠点寺院が山岳霊場を中心に創建され、白山・熊野・薬師・観音などの諸神・諸仏が神仏習合思想を背景に祀られていった。このような寺院は、天台・真言宗の影響下に置かれ、山岳修行を特徴とする修験を組織の中に取り込みながら在地社会に定着していった。

平泉藤原氏の仏教文化は、単に平泉だけにとどまらず、広く奥羽の各地にまで及んだ。『吾妻鏡』によれば、藤原清衡は奥羽の一万余の村ごとに伽藍を建て、それに仏性燈油田を寄進したとされる。「一万余」という数は誇張気味であるが、平泉藤原氏は、新たな宗教文化を構築するに当たっては、安部氏・清原氏によって築かれた在来の宗教的な聖地や施設などの遺産を引き継ぎながら、法華経の教えに基づいて衆生の絶対平等の仏国土の建設を意図し、在来の伝統的・土俗的な信仰を政治的に政権内に組み入れ、再編・整備していったと考えられる。再編の過程では神仏習合思想を背景に、寺社を建立・再興し、諸神・諸仏を祀っていった。

平泉藤原氏は、当時の日本海や太平洋の交易ルートを利用し、熊野三山・白山・出羽三山などから多くの修験者や神人（じにん）を招き、仏国土の建設を推進した。その影響は比叺地方にも及んだと考えられる。文献で確認できる樋爪氏時代の寺社は、高水寺・走湯権現社・蜂神社だけである。『吾妻鏡』は、高水寺の鎮守である走湯権現社や藤原清衡が勧請した大道相の小社の存在を伝えている。比叺館跡には樋爪俊衡が勧請したと伝わる薬師神社と別当寺である大莊嚴寺（廃寺）を伝え、近くには樋爪俊衡の持仏とされる千手観音を祀る嶋の堂が建つ。

山岳寺院である新山寺（廃寺）、蓮華寺（廃寺）は、神仏習合や天台・真言宗の教線拡大、修験道の興隆を背景に、平泉藤原氏時代に建立されたものか、安倍氏・清原氏時代にすでに存在していたものか、その創建時期は不明である。

**末法思想と仏教** 平安時代中頃から鎌倉時代にかけて、政治の実権が貴族から武士へと移る転換期である。この時期は、釈迦の死後に仏教が廃れ、世の中に大きな乱れが生じるという仏教史観による末法思想が流行した。天災・飢饉・戦乱などが続き末法の予言が現実の社会情勢と一致したことから、人々の現実社会への不安は一層深まった。このため、経塚は釈迦の入滅後、56億7千万年後に第二の釈迦としてこの世を救う弥勒仏（未来仏）が現れるまで、経典を地中に保存して後世に残そうとする経塚の造営が盛んに行われた。

中世の人びとにとって、神仏や経典がある場所は霊場と考えられ、死者への報恩や追善を行う重要な場所と受けとめられていた。経塚は法華経を中心とする仏教経典を土中に埋納した塚である。現世利益や極楽往生などの功德を目的とする仏教作善（さぜん＝仏縁を結ぶための善事）とされているが、次第に死者の追善供養の意味が大きくなっていく。このような社会不安が高まるにつれて、即身成仏のような現世での成仏や救いを諦め、阿弥陀仏を念ずることで極楽浄土へ生まれ変わろうとする浄土思想が普及し、鎌倉仏教に受け継がれていく。

浄土の観念はすでに聖徳太子の時代に紹介されているが、10世紀に空也が普及させたことによって注目され、念仏実践の方法は貴族社会に大きな影響を与えた。極楽往生への願いは、念仏だけではなく、堂宇を建て仏像を造る功德の実践が往生の助けとなると信じられた。財力のある貴族層は阿弥陀仏を本尊とする寺や阿弥陀堂を競うように建立した。藤原道長の法成寺、藤原頼通の平等院鳳凰堂が典型とされ、平泉藤原氏もその影響を受け多くの寺院を建立した。

末法思想の流行は、前九年・後三年の合戦の時期とも重なり、平泉藤原氏を中心に北上川流域に経塚の造営が行われた。古代から中世の人びとにとって、神仏や経典がある場所は霊場と考えられ、死者への報恩や追善を行う場所として重要な浄土の場所であった。

北上川流域に位置する紫波町では、複数の経塚が確認されており、末法思想を象徴的に表す宗教遺産といえる。山屋館経塚は、12世紀の平泉藤原氏の時代に営まれた経塚であり、これ以外に五郎沼経塚・新山寺経塚などが確認されている。

板碑（卒塔婆）は、経塚と同じく紫波町を代表する宗教遺産である。当地方には他の地域と比較して時代的に古い板碑が存在する。死後に阿弥陀如来に救われ、極楽浄土に往生できるという阿弥陀浄土信仰は、末法の時代に入ったとされる平安時代中期以降に盛んになった。浄土系諸宗は、念仏を唱えれば極楽浄土に往生できるとしたが、武士や庶民の浄土での往生の願いは、念仏だけでは安心できず、板碑による追善・逆修供養が室町時代に入っても続いた。

比爪館跡には、絵像碑として県内最古の不動明王絵像碑や、比爪季衡の墓と伝えられる墓碑などを含む箱清水板碑群が立ち並ぶ。また、赤沢白山神社が建つ音無山山麓付近には鎌倉時代の年号を刻んだ板碑が複数存在する。板碑は霊場と考えられた寺院周辺に群集すること多い

**神仏習合と修験道** 仏教が列島社会に浸透するに当たっては、在来の神々への信仰と融合する動きがみられた。奈良時代には、神は迷える存在であり仏の救済を必要とするとの考えや、神は仏教を守る護法神であるとする考え、神は仏が衆生救済のために姿を変えて現れたとする考え（本地垂迹思想）などの神仏習合の思潮がみられた。寺院境内に守護神を鎮守として祀り、神社に神宮寺が建てられ、神前読経などが行われた。

平安時代になると、仏教側（顕密仏教）によって神祇信仰が包摂され、神仏の習合化がさらに進んだ。

神仏習合とは、日本古来の土着の神祇信仰と外来の仏教信仰が混淆・融合し、一つの信仰体系として再構成（習合）された状態をいう。たとえば天照大神の本地は大日如来で、この如来が日本に渡ってきて仮に天照大神に姿を変えたとする考え方である。

天台宗・真言宗では、南都仏教（奈良時代の仏教）と違って山岳の地に伽藍を営み山中を修行場としていたことから、その神秘的な教義が靈山を神聖視する在来の山岳信仰（神社）と結びついて修験道の源流となった。修験道は、古来の山岳信仰が外来の仏教（密教）や陰陽道、道教、儒教などの影響を受けながら靈山を修行の場とし、深山幽谷に分け入り厳しい山岳修行によって靈力や呪力を身につけるという実践的な信仰である。修験道は、在来の山岳信仰の対象であった熊野三山、加賀白山、伊豆走湯山、出羽羽黒山、九州英彦（ひこ）山などを修行の場とし全国に拡大した。その影響は志波地方にも及び、社寺建立に大きな影響を与えた。

神仏習合が盛んとなった時代には、新しい神が誕生している。列島社会では古来から肉体から離れた霊が人々にさまざまな影響をもたらすという考えがあった。奈良時代から平安時代にかけて、天災や疫病の流行は死者の怨霊や怨念の仕業と見なされ、その怨霊を丁重に祀ることで、逆に恩恵をもたらす神（御霊）になるという御霊（ごりょう）信仰が興った。これは疫病や災厄をもたらす神に対する従来の信仰と、故人の冥福を祈る仏教思想が融合した信仰といえる。疫病神の牛頭天王を祀る京都八坂神社なども御霊信仰であり、その鎮魂のための儀式である御霊会は、神仏習合的な神事といえる。高水寺城には、牛頭天王社（天王平）があったとされ、長岡の八坂神社は牛頭天王を祀る紫波町では数少ない神社である。

室町時代初頭には、修験院坊である南口詰観音堂（嶋の堂）別当観明院・遠山青麻別当善養院・佐比内態野別当喜明院などの修験院坊が創建されてたことが古記録などから確認できる。

**さまざまな神社** 古来の人々の神社信仰は、血縁・地縁組織を母体とした氏神信仰が主流だった。平安時代以降、本地垂迹説は全国に浸透し、村落の神社の祭神は権社（本地仏をもつ垂迹神）と実社（本地仏をもたない神）に分かれていった。これらの神仏混合の神社は、従来の神道に基づく神社と異なり、修験者・神人（じにん）等を多く抱え、布教活動が行われたことから、その神社の名声を高めるとともに、靈威ある大社の神々（伊勢・八幡・天神・熊野など）が地域を越えて各地に分祀される風潮を生み出した。これは、奈良仏教（南都六宗）・天台宗・真言宗などの旧仏教が仏教信仰を在地社会に広めるために進めた布教政策である。

勧請された神は靈験のある主祭神・流行神と意識され、在来の神は勧請された神のもとで後退し、合祀・末社となって存続したが、社名は靈威のある勧請神に変更されることが多かった。旧来の『延喜式』に登載された式内社は社名を変更して、新たな信仰を加えることになる。勧請型神社の信仰は、流行神として各地方の領主層や修験者、教団によって勧請された。

**中世の神仏** 平安時代には密教、末法思想、浄土信仰の隆盛などを契機として、貴族層や畿内周辺の人々による仏教信仰によって拡大しつつあったが、仏教が庶民に普及するのは鎌倉時代に入ってからである。武家政権の成立・発展のなかで武士による在地支配が強まり、農業や経済流通の発達を背景として各地で農

民や商人・職人が成長した。このような社会・経済の変動に応じて、仏教界でも新しい動きが生じた。鎌倉仏教の誕生である。東北地方ではこのような新たな仏教の展開に対し、この地方が宗教的に空白地帯であり、新たな信仰を受容する宗教的な土壌があったことから、新しい信仰を柔軟に受け入れていった。

鎌倉仏教と呼ばれる新宗派が人々の間に浸透し、各所に寺院が次々と建立された。当地方もその例外ではなかった。中世に創建されたと考えられている町内の寺院は、多い順から曹洞宗・浄土真宗・浄土宗・天台宗であり、新興宗派の寺院が圧倒的に多いことがわかる。

鎌倉仏教は、古代仏教から離脱して原点に回帰するとともに、戒律の復興と禅の実践を求めることを特徴とする。浄土系諸宗は、阿弥陀仏や法華経への信仰を徹底させ、念仏や題目を唱えることだけで救われると説いた。つまり、念仏や題目を唱えるという平易な修行（易行）を一つだけ選び出し（選択）、他の修行の意義を否定してそれだけに専念すること（専修）を主張し、出家せずに普通の生活をしながらの救済を説いた。これが旧仏教派から異端派として弾圧された理由である。しかし、易行・選択・専修という特色をもった新仏教は、顕密仏教の宗教的な呪縛から自立しようとする武士や庶民の期待に応えるものであった。

禅宗は鎌倉・室町幕府に保護され、武士の日常生活を支える精神的支柱となって発展し、それぞれの村や町の鎮守寺院、武士層の祈禱・氏寺として創建された。正法寺（奥州市）は永平寺、総持寺に次ぐ第三の本山とも称され、南北朝時代の貞和4年(1348)に無底良韶（りょうしょう）が開いた東北地方最初の曹洞宗寺院である。東北地方の宗教、文化の形成に大きな役割を果たし、県内には多くの曹洞宗寺院が創建された。当地方でも斯波氏の菩提寺である源勝寺、正法寺の末寺である平沢広沢寺・赤沢正音寺などが開かれた。これ以外にも、常光寺（曹洞宗）・高金寺（曹洞宗）・隠里寺（浄土宗）・極楽寺（浄土宗）・来迎寺（浄土宗）・本誓寺（浄土真宗）などがこの時代に創建され、近世における菩提寺の形成につながった。

本誓寺は、県内に初めて浄土真宗を布教した是信によって開かれた寺院である。是信は彦部を拠点に普及活動を展開し、彦部にはその廟所が造営され、浄土真宗の聖地とされている。

鎌倉幕府の成立以降、各地に形成された武士団も神祇信仰を重んじ、その統合結集のための氏神として、八幡・熊野・神明などの有力な神々が勧請された。斯波氏やその家臣の中には、城館や知行地に鎮守や菩提寺を建立したことが知られている。佐比内館の河村氏は熊野権現社を再興し、土館の山祇神社は山王海太郎の勧請と伝えられている。大巻館があった館山の薬師堂山には、薬師如来を本尊とする真言修験の寺院が多くの僧房を抱えていたと伝えている。

**紫波町の神社縁起の特徴** 紫波町には、坂上田村麻呂が延暦・大同年間（782～810）に創建したと伝えられる寺社が多い。田村麻呂は毘沙門天の化身として英雄視され、その伝説は慈覚門徒が拵げたといわれている。京都清水寺や鞍馬の毘沙門天の信仰が東北地方に波及する過程で、山岳信仰と結びついて形成されたものと考えられている。一方、源頼義や義家が安倍氏と戦った前九年合戦の戦勝祈願あるいは勝利の報謝として創建・再興されたとする寺社も多い。前九年合戦や奥州合戦は、坂上田村麻呂による「征夷」の延長として中央権力から位置づけられ、その英雄譚は武家の棟梁としての名声とともに神話化され、虚実織り交ぜて寺社の由緒にも取り入れられたと考えられる。

坂上田村麻呂や源氏などが関わっている寺社には、平沢八幡神社（坂上田村麻呂の勧請）・片寄白山神社（坂上田村麻呂の勧請）・上平沢志和八幡宮（男山八幡宮を勧請）・土館新山神社（坂上田村麻呂の勧請・藤原清衡の建立・小山朝拈の建立）・志和稻荷神社（源頼義の勧請）・水分神社（坂上田村麻呂の勧請）・長岡八坂神社（坂上田村麻呂の勧請）・赤沢白山神社（坂上田村麻呂の勧請・藤原経清の勧請）・佐比内熊野神社（坂上坂上田村麻呂の勧請）などがある。これらの寺社の中には、安倍氏や清原氏は関与した寺社が含まれている可能性は否定できないが、資料から解明することは困難である。

**近世の宗教と家** 近世の仏教は幕府の統制下に置かれ、民衆支配の一機構として機能することとなった。寺院は宗派ごとに本山・本寺に末寺を掌握させ（本末制度）、人々をいずれかの寺院の檀家として身分を証明させ、布教活動を封じた（寺請制度）。仏教以外の神道・修験道・陰陽道などは、仏教に準じた宗教として容認された。修験道については、聖護院を本山とする本山派（天台系）と醍醐寺を本山とする当山派（真言系）が末端の修験者（山伏）を支配した。

室町時代から江戸時代にかけて、家産・家名・家業を先祖代々継承する「家」が形成された。これは兵農分離が進み、新田開発などによって耕地が拡大し、単婚家族が広範に成立したためである。家の成立や増加によって仏教は家単位で信仰され、その仏教行事（彼岸・盆など）は現代に継承されている。他方、神社は農民の地縁・血縁的結合を単位に信仰され、五穀豊穰の祈念神事や収穫祭礼、講組織などは氏子集団によって担われ、多くの民俗行事を今に伝える。

近世初頭、志波郡の古刹・名刹といわれた高水寺・大莊嚴寺・源勝寺などの六か寺は、盛岡城下へ移された。その損失を埋めるかのように近世期に多くの寺院が相次いで建立された。高水寺城跡に建つ勝源院もその一つである。戦国期に佐比内村にあった浄土宗の来迎寺は、近世期に日詰の現在地へ移転したと伝えるが、それ以前の可能性も考えられる。

多くの金山をかかえる志和（志波）郡には、金山を中心に多数のキリシタン信徒が潜入していた。来迎寺には数少ないマリア観音像が祀られ、安産信仰・子育ての守り神としての信仰の姿を残している。当時のキリシタンの家には仏壇や神棚が祀られ、表面上は仏教徒として振舞っていた。教義を実践する伝道者がいない中で、既存の社会や宗教と共生しながら信仰を守り続けていたことになる。キリシタン信徒は、新たな神を安産や子育ての守り神と見立て、神や仏と同じように信仰の対象にして、形を変えた先祖供養として受け入れたのかもしれない。キリシタン墓碑は、県内でも数少ない貴重な歴史遺産といえる。